

研究ノート

「衛星枠づけ言語」としてのフィンランド語

梶田 寛乃*

1. はじめに

文明や文化をいかに定義するにしても、その誕生や発展が人間言語の存在を前提としていることに疑いの余地はない。その人間言語の研究については、1980年代以降の「認知言語学」の発展により新たな時代を迎えているともいえる。本研究ノートは、その認知言語学の視点に立ち事象の言語化に関する研究をめざすものである。加えて、日本では研究されることが必ずしも多くはないフィンランド語を研究対象とし、その特徴を Talmy の「衛星」概念という考えを援用して明らかにしようとするものである。

ヨーロッパの言語の大多数がインド・ヨーロッパ語族に属するのに対して、フィンランド語はウラル語族のフィン・ウゴル語派に属す言語である。そのフィンランド語はしばしば「膠着語」と表現されるが、語にさまざまな接辞を付加することがインド・ヨーロッパ語族との大きな違いである。たとえば、英語などにおいて前置詞で表現される内容が、フィンランド語では「格語尾」と呼ばれる接尾辞を語に付加することで表現される。同様に、フィンランド語には豊富な派生接辞が多数存在し、その接辞を活用して新しい語を生み出していくという特徴がある。

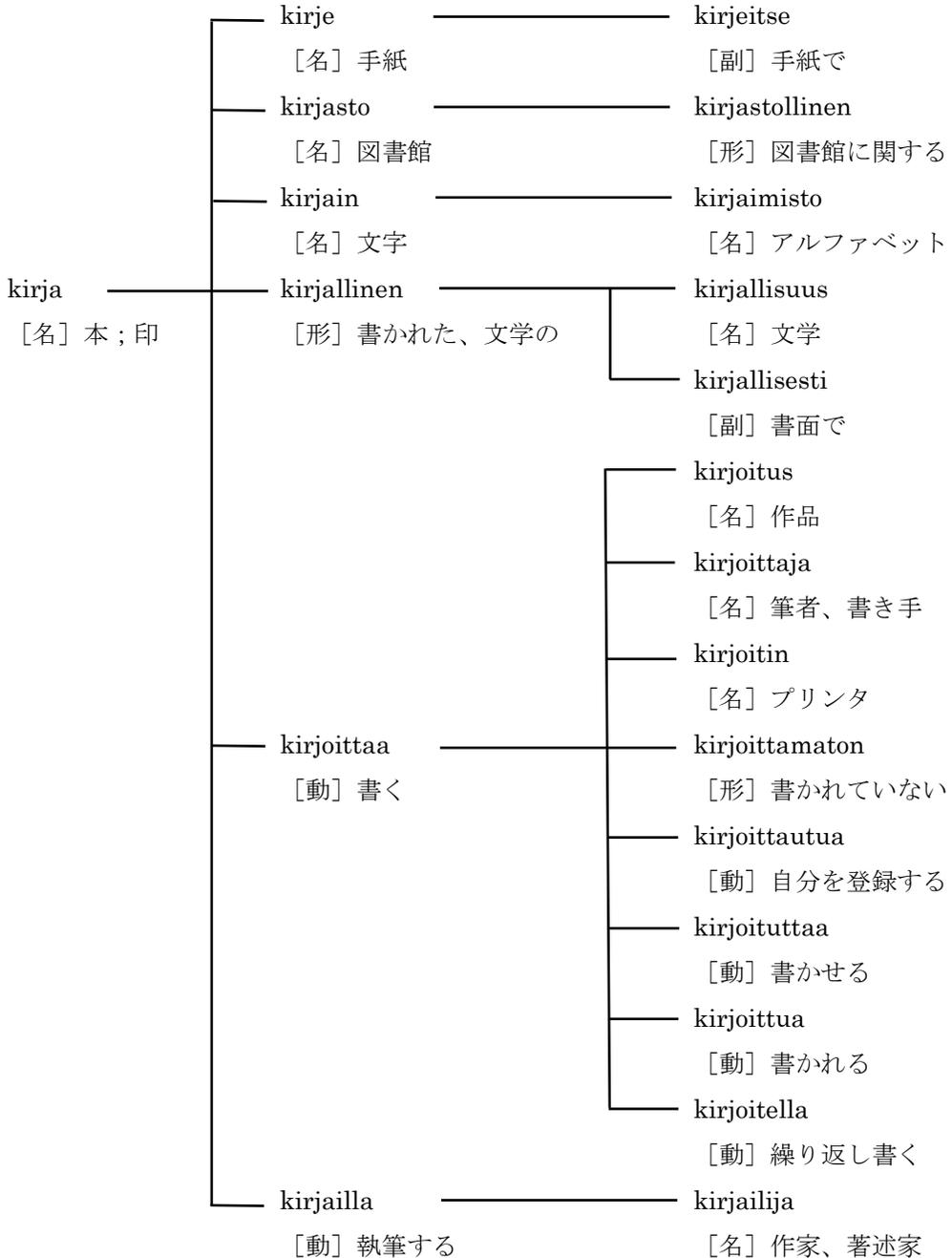
伝統的な定義によれば、「派生」とは派生接辞を付加することにより、それ以前から存在する語にもとづいて新しい語を言語にもたらず方法であるとされる (Kangasmaa-Minn 1994: 37)。フィンランド語ではこの派生が重要な語形成の手段となっているが、たとえば次ページの図 1 にあるように、kirja 「本 ; 印」という語からは、さまざまな接辞を用いて多くの語が派生していることがわかる。

また、図 1 から明らかなように、フィンランド語の派生はほぼすべての品詞にかかわる現象である。それらのうち、今回着目するのは、動詞から派生した動詞である。なお、派生接辞が付加される形態素を「語根」(フィンランド語: kantasana) と

* 東海大学大学院文学研究科文明研究専攻博士課程前期

呼ぶことにする。

<図 1> フィンランド語における派生の一例



2. 事象構造

(1) 事象構造とは

事象とは、「モノ」が参与する「コト」の世界であり、それは人間により行為や状態として認知され、言語的には節（＝文）の形で表現される（大堀 2002: 97; クロフト 2011: 114）。その事象について、クロフトは次のように述べている。

事象はたとえそれが物理的であったとしても、環境のなかで因果的にも時間的にも独立していない。世界とは時間のなかで絶え間なく展開する、きわめて複雑な因果性のネットワークで構成されているように見える。そして私たちが出会うのはその断片にすぎない。経験の断片のどの部分を事象とみなすのかを決定するのが複雑な認知プロセスであることは明らかだ。（クロフト 2011: 115）

つまり、事象構造（event structure）とは「時間のなかで展開する因果性ネットワークの一部と見ることができる」（クロフト 2011: 129）。そして、そのような特徴をもつ事象を言語化するには、「線状化」「切片化」「細密化」という3つの認知プロセスがかかわっているとされる（大堀 2002: 98-99）。

まず、人間は、網の目のように広がる因果関係のなかから一定の部分だけを取り出し、線状的な関係へと還元することで出来事を認知し理解している。このような因果関係の連なりを「因果連鎖」（causal chain）と呼んでいる。ある出来事を因果連鎖として線状化して捉えた後に、その出来事を言語化するには、一連の連鎖のなかから限られた部分を切り取るが、このように、因果連鎖のなかから一部を切り取ることを連鎖の「切片化」（segmentation）と呼んでおり、これが2つ目の認知プロセスである。そして最後に、因果連鎖を分析し言語化するうえで、ある事象をどのくらい細かく分析し言語化するのかという「細密度」の取り方により、事象の言語化には幅が出てくることになる。

以上のことから、「事象を言語化するということは、多方面に広がった因果関係の中から線状の連鎖を抽出した上で、連鎖の一部をある細密度のもとに切片化する作業である」（大堀 2002: 99-100）とまとめることができるだろう。そして、このようにして認知された事象は述語を中心とする節として言語化されていくが、その述語

は多くの場合は動詞である。そして、このように生み出される節の構造には、事象に関して注目すべき 2 つの特徴が大きな文法上の影響を与えていると考えられる。その 1 つは、「状態」「過程」「変化」といった事象のもつ時間的輪郭であり、これらは因果関係によって互いに関連づけられることになる。そして、2 つ目の特徴は、その事象における参与者、そして参与者同士の間が存在する因果関係である（クロフト 2011: 129）。

(2) Talmy による「イベント統合の類型論」

事象構造の代表的な研究者である Talmy は、世界の諸言語の移動の表現に関して、動詞にどのような意味要素が語彙化されるのかを考察し、その類型化を試みている。また、Talmy (2000) は移動表現にかかわる語彙化パターンの類型論を発展させたものとして、「イベント統合の類型論」(typology of event integration) という考え方を提案している。この類型論は、「複合的なイベントがどのように統合されて 1 つの節で表現されるのか、という観点に基づくものである」(松本・井上 2003: 279)。たとえば、「ビンが洞窟から漂いながら出てきた」という文は、移動物が「漂いながら」「移動する」という内容を表しており、この事象は「移動」というイベントと、「漂っている」というイベントが統合されたものだと考えることができる。このような事象を「複合イベント」(complex event) と呼んでいるが、「移動」と「漂う」という 2 つのイベントのうち、「移動」という事象の方が主要な役割をもつものであることから、これを「枠づけイベント」(framing event) と呼んでいる。一方、「漂う」というイベントは、枠づけイベントに対して補助的な関係をもつ「共イベント」(coevent) であるとされる。さらに、枠づけイベントのなかで、「図」と「地」¹の関係を表す要素が「中核スキーマ」(core schema) とされるが、移動の場合の中核スキーマは「経路」である。

イベント統合の類型論では、文のどの要素が中核スキーマを表しているのかという観点から、諸言語の移動表現を類型化している。たとえば、スペイン語や日本語は、中核スキーマとなる「経路」を「入る」や「出る」などの動詞で表すが、このタイプの言語を「動詞枠づけ言語」(verb-framed language) と呼んでいる。このタイプの言語には、ロマンス系諸言語やセム語族に属する言語などがある。一方、英語では中核スキーマである「経路」は”out (of the room)”や ”into the garden”といった副詞や前置詞句などにより表される。そして、Talmy は動詞を修飾するこのような要素を

「衛星」(satellite)と呼び、この要素によって中核スキーマが表現される言語を「衛星枠づけ言語」(satellite-framed language)と呼んでいる。このタイプに含まれるのは、ロマンス語を除くほとんどのインド・ヨーロッパ語族の言語や、フィンランド語を代表とするフィン・ウゴル諸語などである。

Talmyによれば、この「衛星」という概念は、名詞句と前置詞句の補部以外で動詞と密接に結びつくあらゆる構成素からなる文法カテゴリーである。したがって、衛星は、単独では現れない接辞のような拘束接辞である場合もあれば、自立語である場合もあり、次のような文法形式をすべて包括するという意味で重要な概念である。たとえば、英語の分詞形などの動詞不変化詞、ドイツ語の動詞と結びつく分離接頭辞や非分離接頭辞なども衛星概念に含まれることになる。この衛星を1つの文法カテゴリーとして認めるべき根拠は、それによりこれらすべての形式に観察される統語的・意味的な共通性を捉えることができることにある。たとえば、衛星は類型論上ある1つのカテゴリーに属するすべての言語において中核スキーマの表現が現れる位置である(Talmy 2000: 222)。そして、フィンランド語の派生接辞は、このTalmyによる「衛星」概念に含まれるものであると考えられる。

3. フィンランド語の動詞派生接辞

フィンランド語の動詞接辞の分類方法の1つに意味論的分類がある。これは、接辞により派生した語がどのような意味的特徴をもつのかという観点から行われる分類である。意味論的分類にもとづき接辞を付加することで生まれる派生語は次のように3つに分類される(Hakulinen A. et al. 2005: 299)。

- ①他動詞派生語 (フィンランド語: muuttamisjohdokset)
- ②自動詞派生語 (フィンランド語: muuttumisjohdokset)
- ③質修正派生語 (フィンランド語: muuntelujohdokset)

まず、フィンランド語の muuttamisjohdokset という用語だが、これは直訳すれば「変化をもたらす派生語」となる。このような派生語は、動作主が他者に対して何らかの変化をもたらす「使役」の意味をもつ。使役の意味をもつ動詞は一般的に他動詞的であり、変化させること、引き起こすこと、もたらすことを表すことになるため、本稿では「他動詞派生語」と訳すことにする。

一方、*muuttumisjohdokset* は、直訳すれば「自らが変化する派生語」となる。自らが変化することを含意する動詞は自動詞であり、「自動詞派生語」と訳すことにする。自動詞派生語の意味は大きく「再帰」「自動」「変化」に分けることができる。

そして、最後の *muuntelujohdokset* だが、この派生語を生成する接辞は語根となる動詞に何らかの追加の意味を付与する働きをすることから、ここでは「質修正派生語」と呼んでおく。質修正派生語に分類されるのは、接辞により「反復」や「瞬間」の意味を加えられた派生語である。これらの派生語は、語根の性質にしたがって他動詞でも自動詞でもありうる (Hakulinen A. et al. 2005: 299)。

以上のことをまとめると、次ページの表 1 のようになる。なお、フィンランド語の接辞の大多数は後舌母音をもつ変種と前舌母音をもつ変種の 2 つを有する。そのため、フィンランド語研究においては、接尾辞を表記する場合には大文字の A、O、U を使用することがある。これらの大文字は後舌母音と前舌母音の両方を意味する (A=a, ä, O=o, ö, U=u, y)。また、V は母音 (フィンランド語: *vokaali*) を表す。

また、他動詞派生語と自動詞派生語が動詞から派生する場合には、項の数に変化が起きる。たとえば、1 つの項 (主語) しか要求しない自動詞 *pudota* 「落ちる」から派生した *pudottaa* 「落とす」は 2 つの項 (主語と目的語) を要求し、逆に 2 つの項を求める他動詞 *pestä* 「洗う」から派生する自動詞 *peseytyä* 「自分を洗う」は 1 つの項のみを必要とする。一方で、動詞から派生した質修正派生語においては、必要な項の数は変化していない。

(1) 他動詞派生語

他動詞派生語を作る接辞のなかでもっとも重要なものは、使役の意味をもつ *-ttA-* と *-tA-* である。使役の接辞は動詞語幹にも名詞・形容詞語幹にも結びつくことができる (Hakulinen A. et al. 2005: 309)。

jää- 「氷」 > *jää-tä-* 「凍らせる」
syy- 「原因」 > *syy-ttä-* 「非難する」
pääse- 「通る」 > *pääs-tä-* 「通す」
kulke- 「動く」 > *kulje-tta-* 「運ぶ」

動詞語根にもとづく他動詞派生語においては、接辞は要求する項の数を 1 つ増や

<表 1> 動詞派生語の意味論的グループ

	意味論的グループ	典型的な接辞	例
他動詞派生語 (他者に変化をもたらす派生語)	使役： 引き起こすこと、目的語の指示対象を変化させること	-ttA-, -tA-, -Oi-	pudotta- 「落とす」 < putoa- 「落ちる」 kävelyttä- 「歩かせる」 < kävele- 「歩く」
自動詞派生語 (自らが変化する派生語)	再帰、自動： 主語の指示対象に向けられ、変化すること 変化： 主語の指示対象が変化すること	-UtU-, -VntU-, -U-, -tU- -UtU-, -VntU-, -U-, -tU-, -ne-	pesity- 「自分を洗う」 < pese- 「洗う」 siirty- 「移動する」 < siirtä- 「移動させる」 kipeyty- 「痛くなる」 < kipeä- 「痛い」 suurene- 「大きくなる」 < suure- 「大きい」
質修正派生語	反復： 反復すること、継続すること 瞬間： 瞬間性、突然性、一回性	-le-, -ksi-, -hti-, -i-, -o-, -ise- -AhtA-, -Aise-	kysele- 「何度も尋ねる」 < kysy- 「尋ねる」 hypähtä- 「跳び上がる」 < hyppää- 「跳ぶ」

(Hakulinen A. et al. 2005: 299 を改変)

すことになる。そのため、接辞は語根となる動詞の統語論的立場に影響を及ぼすことになる (Hakulinen A. et al. 2005: 309-310)。そうして生まれる派生語は、もとの動詞が意味している行為や出来事、状態を引き起こすことを意味することになる。たとえば、syödä「食べる」という動詞からは、「食べる」という行為を引き起こすことを意味する syöttää「食べさせる」という動詞が派生し、heittää「投げる」という動詞からは heittäätä「投げさせる」という動詞が派生する。これらの例からもわかるように、他動詞派生語の語根となる動詞は自動詞である場合も、他動詞である場合もある。

語根がすでに他動詞である場合には、使役の接辞は「誰かに何かをさせる」という意味をもつ *teetto* 動詞と呼ばれる使役動詞を派生させることがある (*teetto* 「させること」 < *teettää* 「(誰かに何かを) させる」)。この範疇に属する動詞は、フィンランド語においては使役の下位範疇として位置づけられている。本稿では千葉(1986)にならい、このタイプの使役を「依頼使役」と呼ぶことにする。

pese- 「洗う」 > *pese-ttä-* 「洗わせる」

ompele- 「縫う」 > *ompel-utta-* 「縫わせる」

他動詞が語根である場合には、語根がすでに主語と目的語の 2 つの項を要求するため、そこから派生した依頼使役においては、3 つの項が必要とされることになる。この 3 つ目の項は必ずしも明確に表現されるわけではないが、表現する場合には、接格と呼ばれる *-lla* の形を取ることが多い。たとえば、次の *maalauttaa* 「塗らせる」は *maalata* 「塗る」から派生しており、「塗る」ことを指示する人物 (*isä* 「父」)、指示される人物 (*maalarilla* 「ペンキ屋に」)、そして「塗る」という行為の対象 (*talon* 「家を」) を必要とするが、指示される人物の表現は任意であるため、例文では括弧で表している²。

<i>Isä</i>	<i>maala-utta-a</i>	(<i>maalari-lla</i>)	<i>talo-n</i> . ³
父.NOM	塗る-KAUS.3SG	(ペンキ屋-ADE)	家-GEN=AKK

「父はペンキ屋に家を塗らせる」

(2) 自動詞派生語

自動詞派生語を派生させる接辞は *-U-*、*-ne-* である。さらに、他の接辞と *-U-* が結びついた複合接辞も多く存在するが、そのなかで重要なものは *-tU-*、*-UtU-*、*-VntU-* である。*ne-* 接辞は名詞、*U-* 接辞は動詞あるいは名詞に結びつく (Hakulinen A. et al. 2005: 329)。

halpa- 「安い」 > *halpe-ne-* 「安くなる」

siirtä- 「移動させる」 > *siirt-y-* 「移動する」

musta- 「黒い」 > *must-u-* 「黒くなる」

puke- 「服を着させる」 > puke-utu- 「服を着る」

pese- 「洗う」 > pese-yty- 「自分を洗う」

動詞にもとづく自動詞派生語は多くの場合、「再帰」もしくは「自動」の意味をもつ (Hakulinen A. et al. 2005: 329)。再帰とは、何らかの行為や活動が自分自身に向けられることを意味し、たとえば英語などでは再帰代名詞 (oneself) を使って表現されることが多い。次の例文では pseytyy という動詞のなかに再帰の意味が含まれており、再帰代名詞は使われていない⁴。

Lapsi pese-yty-y.
子ども.NOM 自分を洗う-REFL-3SG
「子どもは自分を洗う」

一方、「自動」(フ語: automatiivi/automatiivinen) という用語は、フィンランドの研究者のみによって使われてきたものだとされるが、行為もしくは活動が主語の指示対象に対して自動的に向けられるということにもとづく用語である⁵。たとえば、次の例文では、主語である talo 「家」が自らに働きかけることはできないため、動詞の näkyy 「見える」は「自動」の意味をもつと解釈される。

Tuolla näk-y-y talo.
あそこに 見える-REFL-3SG 家.NOM
「あそこに家が見える」

さらに、動詞にもとづく自動詞派生語がもつ意味を、「再帰」「自動」「受動」の3つに分類しようとする考え方もある (Kulonen-Korhonen 1985; V. Koivisto 1991)。たとえば、次の例文において表現される事態は再帰とも自動とも解釈することは困難であり、人間の行為者を前提とするしかない。その意味で、これらの派生語は「受動」の意味をもつと解釈される。

Silta rakent-u-u viiko-ssa.
橋.NOM 建てる-REFL-3SG 週-INE
「その橋は1週間で建てられる」

(3) 質修正派生語

質修正派生語を生成する接辞は、動詞が表す行為もしくは出来事の質に影響を及ぼすが、動詞の項、もしくは主語と目的語の関係には影響しない。このような接辞は、「反復性」を意味するものと「瞬間性」を意味するものとに分けることができる。反復性を表す代表的な接辞は-le-であり、瞬間性を表す代表的な接辞は-Ahta-と-Aise-である。

反復の派生語は、典型的には非有界的な行為の繰り返しや継続的な状態を表すが、これは、語根となる動詞が意味する行為や出来事が有界的であるということを前提とする (Hakulinen A. et al. 2005: 349)。

kysy- 「尋ねる」 > kys-ele- 「尋ね回る、何度も尋ねる」

瞬間性の意味を含む派生語のうち、-Ahta-により派生した動詞は一般的に自動詞であり、一方、-Aise-の付加された派生語は他動詞である (Hakulinen A. et al. 2005: 361)。

istu- 「座っている」 > ist-ahta- 「座る」

niele- 「飲み込む」 > niel-aise- 「一気に飲み込む」

次の例のように-Ahta-の付加された動詞は、瞬間性という性質により、ある状況の開始を意味する場合がある。

nukku- 「眠る」 > nuk-ahta- 「寝入る」

seiso- 「立っている」 > seis-ahta- 「立つ」

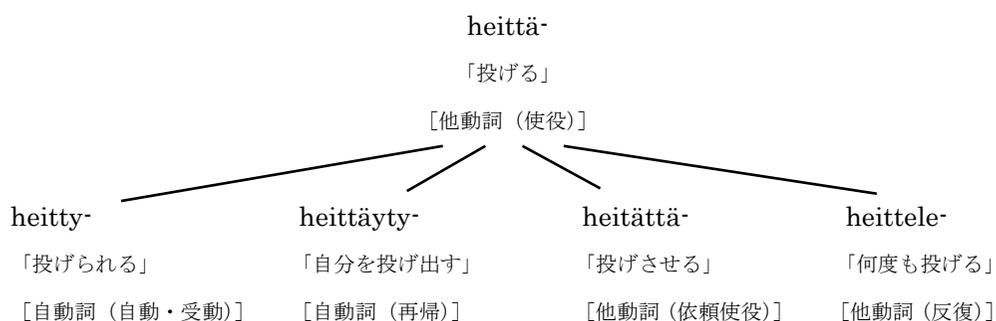
torkku- 「居眠りする」 > tork-ahta- 「居眠りし始める」

一方、-Aise-は瞬間的な、もしくは短い間しか継続しない行為や出来事を表すのが典型的である。

nyki- 「引く」 > nyk-äise- 「一気に引く、瞬時に引く」

以上、意味論的分類にもとづき、他動詞派生語、自動詞派生語、質修正派生語を見てきたが、これらの全体像を表そうとすると図 2 のように描くことができる。ここでは、heittä-「投げる」自身がすでに「使役」の意味をもっているが、そこからは「自動・受動」「再帰」の意味をもつ自動詞、「依頼使役」の意味をもつ他動詞、そして、「反復」の意味をもつ動詞などが、派生という手段を用いて導き出される。

<図 2> heittä-「投げる」を中心とする派生語



また、派生接辞を活用することにより、日本語の「倒す／倒れる」に相当するような他動詞と自動詞の組み合わせを生み出すことが可能である。

他動詞	>	自動詞
jatka-「続ける」		jatk-u-「続く」
kaata-「倒す」		kaat-u-「倒れる」
kasta-「濡らす」		kast-u-「濡れる」
kääntä-「曲げる」		käänt-y-「曲がる」
kirjoitta-「書く」		kirjoitt-u-「書かれる」
自動詞	>	他動詞
elä-「生きる」		elä-ttä-「生かす」
nukku-「眠る」		nuku-tta-「眠らせる」
putoa-「落ちる」		pudo-tta-「落とす」
kävele-「歩く」		kävel-yttä-「歩かせる」
pääse-「通る」		pääs-tä-「通す」

4. フィンランド語の派生と事象構造

すでに述べたように、事象を言語化する際に大きな影響を与えるのが、事象構造のもつ時間的輪郭と、事象に参加するもの間に存在する因果関係である。そこで、ここでは事象における参加者間の因果関係、そして事象のもつ時間的輪郭の言語化において、フィンランド語の派生接辞がいかなる機能を担っているのかという問題について考えていくことにする。

(1) 事象における参加者間の因果関係と派生接辞

他動詞派生語および自動詞派生語を作る接辞は、項の数に変化を引き起こすため、それは参加者の数に変化を引き起こすともいえる。つまり、これらの接辞は、事象構造の観点からすると、事象における「参加者間の因果関係」の言語化に関連する接辞である。

他動詞派生語を作る接辞は、文字通り他動詞を作る接辞だが、それはさらに「使役」と「依頼使役」に分類することが可能である。この使役と依頼使役の間には、事象構造の「参加者」という点において重要な違いを見出すことができる。つまり、使役は事象構造において2つの項、言い換えれば2つの参加者を要求するのに対し、依頼使役は、明確に言語化されない場合もあるが、原則として3つの参加者を想定しているのである。依頼使役について、英語と日本語との比較を行うと次のようになる。

Opettaja	laula-tta-a	oppila-i-lla	uut-ta	laulu-a.
教員.NOM	歌う-KAUS-3SG	生徒-PL-ADE	新しい-PAR	歌-PAR

“The teacher makes students sing a new song.”

「教員は生徒たちに新しい歌を歌わせる」

この例文を見るとわかるように、英語では依頼使役を **make** を使った使役構文、日本語では「させる」という動詞を使った「サセ構文」という分析的な形で表現している。一方、フィンランド語では派生接辞を用いて **laulatta-**「歌わせる」という新たな語を作り出すという総合的手段により依頼使役を表現している。このように、フィンランド語では Talmy のいうところの「衛星」である派生接辞を使って依頼使役を表現しており、英語よりも「衛星枠づけ言語」としての特徴をより強く見せている

と考えられる。

一方、自動詞派生語を作る接辞には、「再帰」「自動」「受動」の3つの意味があった。これらの意味をもつ自動詞派生語は、どれも1つの項、つまり主語のみを要求するという点では共通しているが、事象構造における参与者という観点から見ると違いが見出される。まず、「自動」の場合には参与者は1つであり、それは「中立」もしくは「経験者」の役割をもった主語である。一方、「再帰」の場合、参与者の点では「行為者」と「対象」の2つが想定されているが、この2つの参与者は同一である。そして、「受動」の場合には、言語化されないにしても、異なる2つの参与者の存在が前提とされている。というのも、「受動」には、明確に表現されていないが意味上の「行為者」が存在し、文法的な主語となる参与者は「対象」であるからである (Ktyömäki 1992: 72; Kulonen-Korhonen 1985: 292-293)。また、自動詞派生語においても、再帰の文で英語と日本語との比較を行うと次のようになる。

Hän peseyty-y.

彼女.NOM 洗う-REFL-3SG

“She washes herself.”

「彼女は自分を洗う」

このように再帰の文においても、英語では再帰代名詞を、日本語では「自分」という名詞を目的語として分析的に表現しているが、フィンランド語では再帰の意味をもった動詞 *peseyty-* を派生接辞によって新しく作ることで、総合的手段により再帰を表現している。

以上のことから、英語や日本語では分析的に表現している参与者間の因果関係を、フィンランド語では派生接辞を活用することで総合的に表現していることが少なくないということがわかる。

(2) 事象のもつ時間的輪郭と派生接辞

質修正派生語を作る接辞には、「反復的接辞」と「瞬間的接辞」があったが、これらは事象のもつ「時間的輪郭」に関連する接辞である。ここで着目するのが「アスペクト」(aspect) である。

アスペクトには語彙的アスペクトと文法的アスペクトがあるが、そのうち語彙的

アスペクトとは語彙そのものが本来的にもつ時間的輪郭である。一方、文法的アスペクトとは、何らかの文法的手段により表される時間的な相である。たとえば、英語の完了形や進行形は、それぞれ完了相と未完了相というアスペクトを表現する手段である。フィンランド語においても、動詞が本来的にもつアスペクトと、文法的アスペクトの表現手段である完了形、そして目的語の格によるアスペクトといったものを組み合わせることにより、全体として事象の時間的輪郭を表現している。そのなかで、ここで注目したいのが派生接辞によるアスペクトの表出である。

フィンランド語では、一部の派生接辞を付加することにより、語が本来もっている語彙的アスペクトに変化をもたらすことがある。そして、このように派生接辞によりもたらされるアスペクトは、語彙的アスペクトと文法的アスペクトの中間に位置するものとして捉えることができるため、「派生アスペクト」と呼んでおくことにする。したがって、フィンランド語には事象のもつアスペクトを表現する手段に語彙的アスペクト、文法的アスペクト、そして派生アスペクトという 3 つの段階があると考えることができる。

まず「反復的接辞」についてであるが、これらは「未完了相」のアスペクトを表す接辞である。そして、反復的接辞を付加する場合は、もともになる動詞の語彙的アスペクトは「完了相」であるためアスペクトの変更が起こる。このように、反復的接辞を付加された派生語は、もとの動詞とは異なる事象を表現しているといえる。

kysy- 「尋ねる」 [完了相]

> kys-ele- 「何度も尋ねる」 [未完了相] (反復)

一方、「瞬間的接辞」についてであるが、瞬間的接辞はもとの動詞に瞬間的・起動的な意味を付加し、動詞に「終点」を与える。つまり、もとの動詞のアスペクトを「完了相」に変更している。この点において、瞬間的接辞は反復的接辞と逆の方向へアスペクトを変更する機能を果たしているといえる。

kysy- 「尋ねる」 [完了相]

> kys-ele- 「何度も尋ねる」 [未完了相] (反復)

”keep questioning”, ”question many times”

nukku-「眠る」〔未完了相〕

> nuk-ahta-「寝入る」〔完了相〕（瞬間）

”fall asleep”, ”go to sleep”

この例からも明らかなように、英語や日本語では分析的な手段を用いて表現する事象の時間的輪郭を、フィンランド語では派生接辞を用いて総合的に表現している。このように、フィンランド語では、参与者間の因果関係に加えて、事象のもつ時間的輪郭を表現する際にも派生接辞が重要な役割を担っていると考えられる。

6. おわりに

以上の分析により、他の多くの言語で分析的に表現される事象構造が、フィンランド語では派生接辞を用いることにより総合的に表現されることが多いということが明らかになった。そのため、フィンランド語が「衛星枠づけ言語」としての性質を、同じ「衛星枠づけ言語」である英語などよりも強く見せているのではないかと考えることができるだろう。このように、Talmy の提案した「動詞枠づけ言語」、そして「衛星枠づけ言語」それぞれの内部にも、その性質の強弱には段階があるように思われる。今後は、フィンランド語の特徴をさらに明らかにするために、多くの言語との対照研究を進めていくことを課題としたい。

参考文献

- ウィリアム・クロフト, 2011, 「第3章 事象構造と言語構造」マイケル・トマセロ編 (大堀壽夫・秋田喜美・古賀裕章・山泉実訳) 『認知・機能言語学——言語構造への10のアプローチ』研究社, 113-145.
- 大堀壽夫, 2002, 『認知言語学』東京大学出版会.
- 千葉庄寿, 1986, 「フィンランド語使役構文の被使役者を表す接格名詞句」(取得日 2016年12月27日, <http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/~schiba/pub/tulip17.pdf>)
- 松本曜・井上京子, 2003, 「第6章 意味の普遍性と相対性」松本曜編『シリーズ認知言語学入門 <第3巻> 認知意味論』大修館書店, 251-294.
- Hakulinen, Auli. et al., 2005, *Iso Suomen Kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen kirjallisuuden seura.

- Kangasmaa-Minn, Eeva, 1994, "Derivaatio kielellisenä prosessina," *Sananjalka*, 36: 37-43.
- Koivisto, Vesa, 1991, *Suomen verbikantaisten UtU-verbijohdosten semantiikkaa*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- Kulonen-Korhonen, Ulla, 1985, "Deverbaalisten U-verbijohdosten semantiikkaa," *Virittäjä*, 89: 290-309.
- Kytömäki, Leena, 1992, "Suomen verbinjohto ja sen kuvausongelmat," *Sananjalka*, 34: 69-75.
- Talmy, Leonard, 2000, *Toward a cognitive semantics: Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*, Cambridge: The MIT Press.

-
- ¹ 「図」と「地」とは、もともとは知覚心理学における概念である。人間は何かを知覚する際に、視野が図と地に分割されるが、その際に、際立ちのもっとも大きい部分が「図」であり、その図に対して背景となる際立ちの低い対象が「地」である。Talmy の場合には、移動する可動物である主語が「図」であり、その位置や動きを見定める基準となるものが「地」だが、後者は副詞句などで表現される。
- ² フィンランド語の例文と日本語訳の間には原則としてグロスを付す。グロスとは語を形態素に分け、それぞれに関する情報を付したものである。なお、グロスで使用する略語については、以下のとおりである。

ADE 接格、GEN=AKK 属格・対格、ILL 入格、INE 内格、KAUS 使役の派生接辞
 MAPT 動作主分詞、NOM 主格、PAR 分格、PL 複数、REFL 再帰の派生接辞
 SG 単数、3 3人称

なお、「再帰」「自動」「受動」の意味を表す接辞については、グロスはすべて REFL と表記する。

- ³ フィンランド語においては、依頼使役を、英語の *make* 構文と同じように表現することも可能である。たとえば、*panna* 「させる」という主動詞と、別の動詞の MA-不定詞入格の形を結びつけることができる。

Isä	pane-e	maalari-n	maalaa-ma-an	talo-n.
父.NOM	させる-3SG	ペンキ屋-GEN=AKK	塗る-MAPT-ILL	家-GEN=AKK
「父はペンキ屋に家を塗らせる」				

この文における *panna maalaamaan* 「塗らせる」は、*maalata* 「塗る」から接辞により派生した依頼使役動詞である *maalauttaa* 「塗らせる」と同様の意味を表している。なお、「塗らせる」といった概念を、フィンランド語の *maalauttaa* のように 1 語に凝縮して表現することを総合的、それに対して英語の *make paint* のように複数の語を組み合わせることで表現するこ

とを分析的と呼ぶ。

⁴ フィンランド語でも再帰代名詞 *itse* を使って次のように表現することは可能である。

peseytyy = pesee itsensä 「自分自身を洗う」

⁵ 一般的な言語学で「自動」に対応する用語は「逆使役」とであるとされる (Hakulinen A. et al. 2005: 331)。「逆使役」とは、自動詞の文法的な主語が被動者の役割を与えられている際に、その事象の原因を示すものが示唆されていない場合をさす。